"画像IoT技術"を推進エンジンとするコニカミノルタのDX戦略

Foreword: Konica Minolta DX Strategy Driven by "Imaging IoT Technology"



コニカミノルタ株式会社 執行役 IoTサービスPF開発統括部長

江口 俊哉 Toshiya EGUCHI

Executive Officer
General Manager, IoT Service Platform Development Operations
KONICA MINOLTA, INC.

近年,世界的潮流として多くの企業がDX (デジタルトランスフォーメーション)に取り組もうとしていますが,具体的に何をすればいいのか分からずに足踏みしている企業が多いことも事実です。経済産業省が2018年12月に発表した"DX推進ガイドライン"で示したDXの定義は「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを元に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに業務そのものや組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」としています。つまりDXとは単にAIやIoTの技術を使って新規事業を創出するということだけではなく、それらの技術によって既存の製品やサービス、ビジネスモデル、社内業務までも変革し、会社全体を作り変えることであると言えます。

コニカミノルタは、このDXに対して前中期経営計画「TRANSFORM 2016」の初年度2014年から取り組み始め、「課題提起型デジタルカンパニー」として、顧客とともにDXを推進し世の中から必要とされる企業であり続けることを目指して取り組んでいます。また、コニカミノルタのDXは、独自の"画像IoT技術"を強化しながら進めてきました。当社の長い歴史の中、各事業がそれぞれの強みとして育ててきた「画像技術」(光学デバイスや画像センシング技術)に、最新のIoTやAIの技術を組合せることで、従来のモノ売りビジネスから、画像技術によるデータ活用に強みを持つサービスプロバイダーへの変革に挑戦しています。

そして,当社の"画像IoT技術"は以下3つの戦略で他 社との競争上の優位性確立を狙い強化しています。

- ●独自の"画像センシングデバイス"開発(印刷物検査用スキャナ,超音波プローブ,分光測色計など)
- ②画像 AI (ディープラーニング技術) の対象を絞った 強化 (対象:人行動,先端医療,製造物検査)
- ❸AIアルゴリズムを高速処理する"組込みAI"実装技術の強化(エッジデバイスでリアルタイム処理実現)

この3つの戦略で磨きをかけた"画像 IoT 技術"を推進エンジンとして当社の DX は以下 3 つの観点で取り組んでおり、本レポートではその一部が掲載されています。

- ●既存事業:既存コア技術とデジタル技術の融合による新たな顧客サービス創出とビジネスモデルの変革
- ②新規事業:画像・AI技術の強みを活かし、社会課題の解決に貢献する新たな顧客価値を創出
- ❸社内変革:デジタル技術活用による業務変革と、それを推進するための社内人財トランスフォーム

既存事業においては、複合機、印刷機器、ヘルスケアなどの主力事業で、デジタルデータとAI活用による新たな顧客価値の提案が求められています。事例としては、印刷現場で「人手と専門性」が必要な色や濃度・検討位置の調整などをIQ-501(自動品質最適化ユニット)で自動化し、印刷現場のワークフローをデジタル技術で変革し顧客業務のDXに貢献しています。

新規事業の領域では、介護施設での高齢入居者の行動認識、創薬支援のための標的タンパク質の定量化、工場プラントの危険ガス漏洩監視など、顧客が求める"みえる化"に応える技術を開発し、顧客と一体となって顧客現場の課題を解決し、業務ワークフローを変革するサービスを提案しています。

社内変革では、自社の生産現場で製造機械のデータを収集・分析によるデータドリブンの生産効率化推進や、データ活用で営業の効率化を推進すると同時に、全社で必要となるデジタル技術を活用できる人財の育成施策を実行し、スキルを身につけたデータサイエンティストやIT/システムアーキテクトなどが様々な部門でトランスフォームの推進役として活躍しています。

今後も当社が顧客のDX推進パートナーとして頼られる存在であり続けるため"画像IoT技術"をさらに強化し、自社のDX推進を加速していきたいと考えています。